

## 正親町天皇の半井氏に『医心方』

### を下賜された理由について

高 島 文 一

一五七三年(天正元年)正親町天皇は、時の典薬頭、半井瑞策に、宮中に秘蔵されていた『医心方』全三十巻を下賜された。

九八四年、丹波康頼が献上して以来、五八九年間、門外不出であった医心方が、こともあろうに丹波家とはライバルの関係にあった和気家の改姓した半井家に下賜されるとは、常識では考えられないことである。これについて考察を加えてみたい。

#### 一、半井家の興隆

神別の和気家は、蕃別の丹波家よりは堂上では格は上であるが、丹波康頼が『医心方』を献上して以来、学問の上では、丹波氏が上位となり和気氏は肩身のせまい思いをししてきた。和気明親は、一五〇四年から十六年間、明に渡

り、金元医学を身につけて帰朝した。

和気家には、清澄な水の湧き出る井戸があり、半ば禁裡御料に用い、半ば私用に供することを許されていた。後柏原天皇は、これを半井ナツライと命名された。これを記念して明親は和気家を半井家と改姓した。

明親の孫の光成は、名医のほまれ高く、瑞策とも通仙院とも号した。宮内大輔となり正親町天皇の信任を受け、深黒素絹衣を着て参内することを許され法印の上座に着座した。また、織田信長に接近し、信長上洛の時は、自分の邸を宿泊所に提供した。

#### 二、丹波家の没落

丹波家の本家は盛直が継いでいたが、相模地方の荘園が横領されて、生活にも困窮するようになっていた。一五四六年(天文十五年)盛直は、北条氏の助けを借りて、荘園を奪回しようとして相州へ下向する途中、箱根山中で急逝した。このため正統が断絶することになった。この後、二百年近く経て、一七二六年(享保十一年)盛直の跡目をつぐものとして、頼庸が任命された。頼庸は丹波家の支流の小森家の出であるが、錦小路家を創立していたので、一七二六

年以後は錦小路家が正統となるわけである。

### 三、和氣、丹波兩家の姻戚關係

半井明親の伯父の明重は初代和氣時雨以来、十三代目に典薬頭となった丹波重長の長男である。

特に請われて丹波家から、和氣家へ養子となってきた人である。従って、丹波、和氣の両方の流儀にくわしく、丹波、和氣の対立的意識も少なかったのではないかと思われる。

### 四、時代の背景

平安時代、丹波家に受けつがれた『医心方』は、医家のみならず、知識人の教養として広く世に用いられたが、鎌倉時代以後は、学問の低下により実用的医術がおこり、『医心方』は省みられることが少なくなった。『医心方』の実用的価値感も薄れてきたとも言えるし、宮中の秘庫に保存された『医心方』に関心が少なくなってきたとも言える。

### 五、正親町天皇と半井瑞策

半井瑞策は宮内大輔であり、正親町天皇の側近中の側近ともいえる。名医のはまれも高い。治療の功により褒美と

して、何を与えられても不思議ではない。

また、正親町天皇は、英明の君主であり、曲直瀬道三が法印の身でありながら、キリスト教会に入り入りに忠告を与えられたという記録がある。時代の背景、和氣、丹波兩家の血統が入りまじっていること、丹波家の没落等の事情から『医心方』を下賜される決心をなされたのではないか。

これが、二百八十年後、安政年間に多紀と改姓した丹波氏と半井氏との間に『医心方』の伝写をめぐって騒動をおこすとは、当時としては考えられなかったことではなからうか。

(明治鍼灸短大)